

親の生きる力と子どもの生きる力

Living skills of parents and children

安藤 玲子¹⁾ 池田 まさみ²⁾ 宮本 康司³⁾

Reiko ANDO

Masami IKEDA

Koji MIYAMOTO

【問題の背景】

1. 生きる力とは

急速に進展する高度情報化社会において、積極的かつ主体的に生き抜くための「生きる力」の教育は最重要課題の一つである。「生きる力」とは、文部省（現・文部科学省）第15期中央教育審議会第1次答申（1996）のなかで掲げられた教育目標である。それは児童・生徒が「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」を身につけることを目指している。

その育成ポイントは、思考力、判断力、表現力である。これらの力は、大学生ではコミュニケーションスキルといった「汎用的技能（ジェネリックスキル）」や「創造的思考力」などの「学士力」（文部科学省）に、社会人では「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の「社会人基礎力」（経済産業

省、2006）に通じるものである。また、これらの力に共通するのは「問題解決力」であり、問題を解決するためには「既存の成功モデルの踏襲」ではなく、「創造的に課題解決していく力」が求められると同時に、子どもたちを教育・保育する教員や保育者にも自ら創造的な課題解決能力をもつことが求められる（藤木、2009）。

近年、学士力や社会人基礎力が見直される背景には、本来、大学入学時まで身に付けておくべき「生きる力」の教育が危うくなっていることが考えられる。「生きる力」は、それが将来「社会に生きる知」へと発展することを見据えたうえで、発達の比較的早い段階から、学校や家庭において、日常生活にも有効となる汎用的な学習スキルの習得として取り組む必要がある。

2. 生きる力と批判的思考力

藤木（2009）によると、創造的な課題解決力を有している教員・保育者は、常に自分の教育・保育を振り返りながら、そのときそのときでより良いと思われる教育・保育実践を行おうとする反省的实践家であるという。そして、その能力の基礎には「批判的思考」が

1) 金城学院大学人間科学部

2) 十文字学園女子大学

3) 東京家政大学

関わっているとされている。

批判的思考に関する定義は研究者によって異なるが、先駆的な研究者の一人であるEnnis (1987) は「何を信じ、行動するか決定に焦点化した合理的で省察的な思考」と定義している。批判的思考には、情緒的側面と認知的側面があり、前者の態度・傾向は12の要素、後者の能力・スキルは16の要素からなる(Ennis, 1991)。また、批判的思考は、態度とスキルの両側面を併せ持つことが重要であり、さらに、それが発揮されるべき状況において上手く機能しなくては意味をなさない。まさに、状況に即した「問題解決力」が問われることになる。

米国ではすでに1930年代から、情報を正しく判断し行動するための指導の必要性(市川, 2001)、あるいは国語科や社会科など学校教育において議論の進め方の妥当性・真偽性・適合性を評価する観点から、批判的思考が注目されてきた(井上, 1984)。また、米国の大学では哲学(論理学)のなかで批判的思考の講義に関する単位取得を卒業要件とするなど、高等教育においても早くからその実践教育に力が注がれてきた。一方、日本では、1980年代、文章読解のなかでその必要性が示唆されたものの(久原・井上・波多野, 1983)、情報活用能力(沖林・神山・西井, 2006)やメディアリテラシー(後藤, 2006)の育成にまでその関心が拡大したのは、「生きる力」の教育目標が掲げられた1996年以降である。つまり、基礎知識の習得に重点を置いた従来の教育から、「考える力」の育成への移行に伴い、批判的思考力は、学校教育が目指す「社会の情報化に対応できる基礎的能力と情報活用能力」育成の中核に位置し、「生きる力」と密接に結びつくようになったと考えられる。従って、米国などと比べると、日本の「批判的思考」教育はまだ端緒についたばかり

りと言え、統一的かつ体系的な教育システムの開発が待たれるところである。

3. 親の生きる力と子どもの生きる力

「生きる力」と「批判的思考力」が密接な関係にあるのは、いずれも生活や職場環境、人間関係など、それぞれの状況に応じて有効に機能すること、すなわち、生活に根差した柔軟かつ創造的な課題解決力が求められるからであろう。先に言及したように、子どもたちを教育・保育する者にも自ら創造的な課題解決能力をもつことが求められることから(藤木, 2009)、実際にそれを評価する際には、批判的思考力の尺度が有効になるかもしれない。ただし「生きる力」は、批判的思考力よりも「状況」による制約が強く、たとえば、子どもの初期教育において、主たる保育者となる親の「生きる力」には、子育てに関わる特定の生活環境や人間関係などを測定尺度に設定する必要がある。

例えば、親の生きる力に関連する研究のなかで、楠見・平山(2009)は、20歳代から60歳代の成人男女1500名を対象にインターネット調査を行い、批判的思考態度、科学リテラシー、食品に関するリスク知識・リスクリテラシーについて、学歴との関係および各変数の関連性に関して検討を行っている。その結果、批判的思考態度、科学リテラシー、食品リスク知識には、学歴が関連し、教育歴が長いほどこれらが高いことが示された。一方、食品リスクリテラシーに関しては、食品に関する情報収集と行動、食品の成分や添加物を気にするといった食品リスク感性、食品の原産国を気にする輸入品回避のいずれについても学歴差が少なく、やや短大卒が高かったのは主婦層の傾向が反映されているからではないかと指摘されている。また、女性であることと子どもがいることが食品リスクリテラ

シー全般に正の影響力を持ち、情報収集と食品リスク感性が高いほど輸入品を回避する傾向があることも示された。

子どもの「生きる力」の教育に視点を戻すと、発達過程の最初期にその大半を過ごす子どもの養育環境は極めて大切であり、特に、時間を最も多く共有する母親の存在は大きく、重要な役割を担うと考えられる。また「生きる力」とは逆に、子どもの問題行動について見てみると、母親の学歴や養育態度などが関係することが国内外の研究で指摘されている(e.g., 池田・安藤・宮本, 2012; Marmot, 2007)。4～5歳児の子どもをもつ母親を対象に行ったカナダの調査(Kohen, 2008)では、地域との社会的つながりが弱いと、母親が抑うつになったり、家庭が機能不全に陥るなどして、適切な養育が行われず、子どもの問題行動につながる可能性が指摘されている。すなわち、適切な養育環境には、親の「生きる力」の影響が大きいと考えられる。楠見・平山(2009)の研究にも見られるように、批判的思考態度や科学リテラシーなどが親の学歴と関係するのであれば、親の学歴が子どもの「生きる力」の教育に影響する可能性があり、確認する必要がある。また、親の「生きる力」がどのような要素で構成され、そのうち、どのような要素が子どもの「生きる力」へ影響するのかといった点も調べる必要があるだろう。そのためには、親の「生きる力」について、地域や社会とのつながりを中心とした生活環境や人間関係に関する尺度を作成し、上記の問題を検証したうえで、子どもの「生きる力」の教育のあり方を検討する必要がある。

そこで、本研究では、第一の目的として、「親の生きる力」と「子どもの生きる力」に親の学歴が関連するのかどうかについて確認する。そして、「子どもの生きる力」に対し

て、「親の生きる力」のどのような要素が影響するのか、重回帰分析によって検証する。さらに、このような関係が親の最終学歴によって異なるのかどうかについても確認を行う。

【方法】

調査対象と調査方法 首都圏某区の公立および私立幼稚園(全14園)の園児の保護者822名(女性:799名, 男性:23名)を対象とした。調査は幼稚園を通じて全1,144世帯に調査紙を配布し、留置法により後日回収した。回収率は72%であった。

調査時期 調査は、2010年12月3日～2010年12月20日に実施された。

調査内容

親の生きる力 「社会人基礎力」(経済産業省, 2006)および廣岡ら(2000, 2001)の大学生対象のクリティカルシンキング尺度を参考に、未就学児の保護者を想定した「親の生きる力」の達成スキルと対人スキルの項目を作成した。達成・対人スキルそれぞれについて、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い、因子負荷量が.3に満たない項目や複数の因子から因子負荷が示され弁別性がないと判断された項目等を削除した結果、それぞれに4因子が抽出され、以下のように命名した。

達成スキルに関しては、「やることの段取りを考えている」などの5項目で構成される「論理性」因子($\alpha = .733$), 「経験したことのないことにもチャレンジしてみたい」などの3項目で構成される「探究心」因子($\alpha = .652$), 「自分の調べたことが正しいかどうか、他の資料などで確認している」など3項目で構成される「情報収集・整理」因子($\alpha = .666$), 「面白いことや楽しいことを自ら見つけている」など3項目で構成される「対処能力」因子($\alpha = .633$)で、全14項目での α 値

は.827であった。

対人スキルに関しては、「園の他の保護者と、園の方針や先生について、話すことがある」など5項目からなる「子育て関連の情報交流」因子 ($\alpha = .703$), 「人前でも緊張せずに自己紹介している」など3項目で構成される「対人効力」因子 ($\alpha = .705$), 「自分の子ではなくても叱るべきときはきちんと叱っている」など3項目からなる「自他の子の世話」因子 ($\alpha = .576$), 「使うべきときに、きちんとした敬語を使っている」など3項目からなる「他者への礼儀」因子 ($\alpha = .586$) で、全14項目での α 値は.808であった

子どもの生きる力 「小中学生の生きる力の自己評価」(ベネッセ, 2001)を参考に、未就学児用の「子どもの生きる力」項目を作成した。言語能力の関係から、対象の園児の普段の行動については、回答者である保護者に評価させる形で回答を得た。最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い、成人用尺度と同様に項目の精査を行った結果、次の6因子が抽出された。

「危ないところには近寄らない」などの6項目からなる「公共意識」因子 ($\alpha = .800$), 「翌日のしたくや準備をすることができる」などの6項目からなる「自主性」因子 ($\alpha = .779$), 「ものごとを工夫して取り組むことができる」などの4項目からなる「創造性・探究心」因子 ($\alpha = .699$), 「友だちと仲良く遊ぶことができる」など3項目からなる「対人効力」因子 ($\alpha = .823$), 「家族やまわりの人に“ありがとう”と言える」など3項目からなる「他者への礼儀」因子 ($\alpha = .769$), 「絵や写真などを見て、感動している」など3項目からなる「感受性」因子 ($\alpha = .737$) であった。なお、全25項目での α 値は.881であった。

これらの2変数に関して、「まったく当てはまらない」から「よくあてはまる」までの

4件法で尋ねた。なお、尺度の信頼性を示す α 係数がやや低い因子もあるが、因子を構成するうえで最低限必要とされる3項目で構成されていること、また全体での α 係数が高いことなどを考慮すると許容可能な範囲と考えられるため、各因子項目の平均値を下位尺度得点として用いた。

デモグラフィック要因 回答者の属性と社会経済的な状況を確認するため、①園児の年齢と性別、②園児との続柄、③回答者の年齢層、④回答者の最終学歴、⑤回答者の就業形態を尋ねた。回答に際しては、①のみ実数記入を求め、他は各々選択肢を設けて尋ねた。なお、学歴と就業形態については、倫理的な配慮のため「回答したくない」という選択肢を設けた。

【結果】

回答者の属性・社会経済的状況

回答者の年齢層は、30歳代が66.6%で一番多く、次が40歳代(29.0%)で、この二つの年齢層で全体の95.6%を占めていた。回答者と園児との続柄は、母親796名(96.8%), 父親21名(2.6%), 祖母3名(0.4%), 祖父2名(0.2%)でほとんどが母親であった。また、Table 1に示したように最終学歴は、高校(20.7%), 短大(44.5%), 大学(23.0%)が、全体の88%を占めていた。就業形態に関しては、専業主婦が72.4%で最も多く、パート・アルバイトが16.1%で続いていた。

回答者が評価した子どもの生きる力の対象となった園児の性別は男児404名、女子417名、平均年齢は 5.25 ± 0.88 歳で、Table 1に示したように、5歳代(38.0%)が最も多かった。

各変数の平均値と標準偏差

基礎的資料としてTable 2に「親の生きる力」の達成・対人スキルの得点と「子どもの生きる力」の総合得点、および各変数の下位

Table 1 調査対象者の社会経済的状況 (n=822)

	度数	(%)		度数	(%)
回答者の年齢層			回答者の就業形態		
20歳代	27	(3.28)	正社員・自営業 (フルタイム)	70	8.52
30歳代	547	(66.55)	派遣・契約 (フルタイム)	5	0.61
40歳代	238	(28.95)	パート・アルバイト・フリー	132	16.06
50歳代	2	(0.24)	無職・専業主婦 (夫)	595	72.38
60歳以上	3	(0.36)	回答したくない	15	1.82
無回答	5	(0.61)	無回答	5	0.61
対象者の最終学歴			子ども (園児) の性別		
中学校	7	(0.85)	男児	404	(49.15)
高校	170	(20.68)	女児	417	(50.73)
短大・高専	366	(44.53)	無回答	1	(0.12)
専門学校	2	(0.24)			
大学	189	(22.99)	子ども (園児) の年齢		
大学院	68	(8.27)	3歳以下	70	(8.52)
回答したくない	14	(1.70)	4歳	224	(27.25)
無回答	6	(0.73)	5歳	312	(37.96)
			6歳	190	(23.11)
			無回答	26	(3.16)

Table 2 各変数の平均値と標準偏差

	M	SD		M	SD
大人の生きる力 (n=807)			子どもの生きる力 (n=811)		
達成スキル全体	2.99	0.37	全体	3.19	0.35
論理性	3.13	0.40	公共意識	3.24	0.47
探究心	3.05	0.62	自主性	2.86	0.52
情報収集・整理	2.67	0.55	創造性・探究心	3.37	0.51
対処能力	3.02	0.49	対人効力	3.38	0.55
対人スキル全体	2.94	0.39	他者への礼儀	3.31	0.58
子育て関連の情報交流	3.11	0.50	感受性	3.20	0.55
対人効力	2.65	0.60			
自他の子の世話	2.61	0.59			
他者への礼儀	3.29	0.41			

尺度得点に関し、平均値と標準偏差を示した。

「親の生きる力」の最終学歴での比較

「親の生きる力」の得点が、回答者の最終学歴によって異なるかについて検討を行うため、一元配置分散分析を行った。なお分析では、全体の88%を占める高校、短大、大学に少数のカテゴリを組合せ、「中学・高校」「短大・高専・専門学校」「大学・大学院」の3カテゴリを用いた。

多重比較の結果、「親の生きる力」の達成

スキルは、回答者の最終学歴が大学・大学院の場合に、0.1%水準で中学・高校卒および短大・高専・専門学校卒よりも高く、短大・高専・専門学校卒である場合は、5%水準で中学・高校卒よりも高いことが示された。また、「親の生きる力」の対人スキルは、回答者の最終学歴が大学・大学院の場合に、5%水準で中学・高校卒よりも高いことが示された (Table 3 参照)。

上記の結果について、因子ごとに詳細にみ

ると、達成スキルの全ての因子について、回答者の最終学歴が中学・高校であるよりも、大学・大学院であるほうが、有意に高いことが示された。このうち、「論理性」と「情報収集・整理」に関しては、中学・高校卒と短大・高専・専門学校卒の平均値に有意差は示されなかったが、大学・大学院卒の平均値がこれらの2群よりも有意に高いことが示された。また、「探究心」に関しては、中学・高校<短大・高専・専門学校<大学・大学院という不等式で平均点の有意差が表現できることが示された。

対人スキルの各因子に関しては、「対人効力」「他者への礼儀」では、中学・高校卒と短大・高専・専門学校卒の平均値に有意差は示されなかったが、大学・大学院卒の平均値がこれらの2群よりも有意に高いことが示された。また、「子育て関連の情報収集」に関しては、大学・大学院卒の平均値は他の2群と有意な差はなかったが、短大・高専・専門学校卒の平均値は中学・高校卒よりも有意に高いことが示された (Table 3 参照)。

一方、「自他の子の世話」に関しては、回答者の最終学歴による違いはみられなかった。

「子どもの生きる力」の最終学歴での比較次に、「子どもの生きる力」の得点が、回答者の最終学歴によって異なるかについて、一元配置分散分析によって確認した。多重比較の結果、「子どもの生きる力」の総合得点は、回答者の最終学歴が大学・大学院の場合に、中学・高校よりも5%水準で高いことが示された。

因子ごとにみると、「公共意識」に関して、大学・大学院卒の場合に、中学・高校卒よりも得点が高いことが示され、「創造性・探究心」に関しては、中学・高校卒と短大・高専・専門学校卒の平均値に有意差は示されなかったが、大学・大学院卒の平均値がこれらの2群よりも有意に高いことが示された。

一方、「自主性」「対人効力」「他者への礼儀」「感受性」の4因子に関しては、回答者の最終学歴によって変わらないことが示された。

「子どもの生きる力」への「親の生きる力」の影響

最後に、「子どもの生きる力」に対して、「親の生きる力」のどの要素が影響を与えるのかを確認するため、「子どもの生きる力」

Table 3 「親の生きる力」の最終学歴による分散分析の結果

	中学・高校 (n=172)	短大・高専・専門学校 (n=363)	大学・大学院 (n=253)	F	p<
	m (sd)	m (sd)	m (sd)		
達成スキル	2.88 (0.39)a	2.97 (0.36)a*, b	3.08 (0.36)a***, b***	16.050	.001
論理性	3.06 (0.40)a	3.11 (0.40)b	3.21 (0.41)a***, b**	7.421	.001
探究心	2.86 (0.67)a, b	3.03 (0.59)a**, c	3.19 (0.58)b***, c**	15.804	.001
情報収集・整理	2.58 (0.55)a	2.63 (0.53)b	2.78 (0.55)a***, b**	8.236	.001
対処能力	2.92 (0.51)a	3.03 (0.47)	3.09 (0.50)a**	6.054	.01
対人スキル	2.88 (0.41)a	2.95 (0.37)	2.99 (0.38)a*	3.556	.05
子育て関連の情報交流	3.03 (0.50)a	3.15 (0.47)a*	3.10 (0.52)	3.879	.05
対人効力	2.55 (0.62)a	2.62 (0.59)b	2.77 (0.58)a***, b**	8.043	.001
自他の子の世話	2.66 (0.56)	2.59 (0.58)	2.63 (0.61)	0.744	n.s.
他者への礼儀	3.22 (0.43)a	3.27 (0.41)b	3.36 (0.40)a***, b*	7.011	.001

注 表中のアルファベットは多重比較の結果を示している。同じアルファベット間 (例, aとa*, bとb**など) に有意差があることを示す。

注 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 「子どもの生きる力」の回答者の最終学歴による分散分析の結果

	中学・高校 (n=176)	短大・高専・専門学校 (n=365)	大学・大学院 (n=257)	F	p<
	m (sd)	m (sd)	m (sd)		
全体	3.15 (0.37)a	3.18 (0.35)	3.23 (0.35)a*	3.465	.05
公共意識	3.18 (0.45)a	3.23 (0.46)	3.30 (0.47)a*	4.004	.05
自主性	2.83 (0.55)	2.84 (0.51)	2.90 (0.52)	1.406	n.s.
創造性・探究心	3.29 (0.53)a	3.33 (0.52)b	3.47 (0.46)a*** b**	7.857	.001
対人効力	3.39 (0.55)	3.38 (0.53)	3.37 (0.59)	0.048	n.s.
他者への礼儀	3.17 (0.54)	3.22 (0.56)	3.20 (0.55)	0.545	n.s.
感受性	3.25 (0.61)	3.31 (0.57)	3.34 (0.59)	1.263	n.s.

注 表中のアルファベットは多重比較の結果を示している。同じアルファベット間に有意差があることを示す。
注 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

の総合得点を従属変数にし、「親の生きる力」の各因子を独立変数にした重回帰分析をステップワイズ法を用いて行った。

まず、全体に関する分析を行った結果、「論理性 ($\beta = .180, p<.001$)」「他者への礼儀 ($\beta = .209, p<.01$)」「子育て関連の情報交流 ($\beta = .110, p<.01$)」「対処能力 ($\beta = .112, p<.001$)」が、「子どもの生きる力」に対して正の影響力を持つ「親の生きる力」の因子であることが示された。

次に、このような影響関係が親の最終学歴

によって異なるのかについて確認するため、学歴別に重回帰分析を行った。その結果、回答者の最終学歴が中学・高校卒の場合、「他者への礼儀 ($\beta = .260, p<.05$)」「論理性 ($\beta = .201, p<.01$)」が、短大・高専・専門学校卒の場合は、「他者への礼儀 ($\beta = .269, p<.001$)」「対処能力 ($\beta = .181, p<.001$)」「探究心 ($\beta = .110, p<.05$)」「論理性 ($\beta = .120, p<.05$)」が、大学・大学院の場合は、「論理性 ($\beta = .304, p<.001$)」「子育て関連の情報交流 ($\beta = .208, p<.001$)」「探究心 ($\beta = .147, p<.05$)」

Table 5 「子どもの生きる力」への「親の生きる力」の影響 (ステップワイズ法による重回帰分析結果)

	子どもの生きる力							
	全体 (n=788)		最終学歴					
	β	t	中学・高校卒 (n=172)		短大・高専・専門 学校 (n=363)		大学・大学院 (n=253)	
達成スキル								
論理性	.180	4.406***	.201	2.440**	.120	1.999*	.304	5.167***
探究心					.110	2.151*	.147	2.441*
情報収集・整理								
対処能力	.112	3.064***			.181	3.382***		
対人スキル								
子育て関連の情報交流	.110	3.176**					.208	3.561***
対人効力								
自他の子の世話								
他者への礼儀	.209	5.405**	.260	3.162*	.269	4.931***		
R^2	.211		.162		.255		.222	
調整済み R^2	.207		.152		.247		.213	
F	53.46***		16.259 ***		30.447 ***		23.742 ***	

注 表中の β は、標準化係数である。最終的にモデルに投入された親の生きる力の因子のみ記載した。

注 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

が、それぞれ、「子どもの生きる力」に対して正の影響を持つ「親の生きる力」の因子であることが示された。

【考察】

本研究では、まず、「親の生きる力」と「子どもの生きる力」への保護者の学歴の関連について検討を行い、次に、「子どもの生きる力」に対して、「親の生きる力」のどのような要素が影響するのかについて確認した。そして最後に、このような影響関係が親の最終学歴によって異なるのかについて確認した。以下に結果についての考察を行う。

親の生きる力と最終学歴

一元配置分散分析の後の多重比較の結果から、「親の生きる力」には、回答者の最終学歴が関係し、大学・大学院卒のように教育歴が長いほど「親の生きる力」の達成スキルと対人スキルがどちらも高いことが示された。特に達成スキルに関しては、この傾向が強く、大学・大学院卒者の達成スキルの全4因子の得点は中学・高校卒者の得点よりも有意に高く、さらに、この中の「論理性」「情報収集・整理」「探究心」は、短大・高専・専門学校卒者の得点よりも有意に高かった。「親の生きる力」の達成領域に含まれる「論理性」「探究心」などは、批判的思考態度の重要な要素であることから、この結果は、教育歴が長いほど批判的思考力や科学リテラシーが高いという楠見・平山(2009)の知見と一致するといえるだろう。本研究の結果から、大学など、常に自ら考えることを求められる高等教育によって、「親の生きる力」の達成スキルが育成される、もしくは達成スキルを身につける素地作りがなされていると言えそうである。

また、親の生きる力の「対人スキル」に関しても、「対人効力」「他者への礼儀」におい

て、大学・大学院卒の得点が、中学・高校卒や短大・高専・専門学校卒よりも有意に高いことが示された。「対人効力」は、主に新しい対人関係の構築や維持にかかわる能力であり、「他者への礼儀」は、敬語などを臨機応変に使い分ける能力である。これらの能力が大学・大学院卒で高い理由について考えてみると、大学・大学院では、通常、中学や高校、短大などよりも広い地域から学生が集まってくるが多く、様々な価値観を持つ人と会う機会を得やすい。そして、教員、大学職員、サークルや部活、アルバイトやボランティア先など、様々な立場の人とのかかわりの中で、大人の一員としての社会性を構築する機会が与えられる。そのため、そのような機会が長い期間与えられる大学・大学院の卒業生の対人スキルがより育成されると考えられる。なお、このようなコミュニケーション能力が活かされると考えられる「子育て関連の情報交流」に関しては、5%水準ながらも「親の生きる力」の中で唯一、短大・高専・専門学校が最も高得点となり、中学・高校卒よりも有意に高いという結果が得られた。この結果は、短大・高専・専門学校卒の母親は、地域活動により積極的な態度を持つことを示すのかもしれないが、単に専業主婦が多いからかもしれない。そこで、就業形態と学歴でクロス集計したところ、大学・大学院卒では、30.5%が何らかの形で就業し、そのうちフルタイムで働いている人が13.3%であったのに対し、短大・高専・専門学校卒では、23.5%の就業率(フルタイム7.38%)、中学・高校卒では、22.6%の就業率(フルタイム7.34%)であった。したがって、中学・高校と短大・高専・専門学校卒間の得点差は、同程度の就業率において生じた差であると考えられ、短期間ながらも高等教育機関での経験が関与している可能性がある。一方、大学・大学院卒者に関

しては、就業などで物理的な時間が少ないために、子どもに関する情報交換に使う時間が少ないことを反映しているのかもしれない。この点については今後、詳細な検討が必要である。

なお、外山・小館・菊地(2010)は、育児サポートへのインターネット利用に関する調査において、教育歴が低い人ほど、インターネット上で相談したことがないか、インターネット上でのみ相談しているかのどちらかであったと指摘している。この結果と本研究の結果を併せて考えると、教育歴が低い人で、子どもに関する情報収集にインターネットを使用していない場合は、達成スキルも対人スキルも低く社会的に孤立し、子どもに関する悩みを十分に解消できない可能性がある。したがって、このような保護者に対しては、地域社会、行政、および園などから積極的なアプローチが必要かもしれない。

「子どもの生きる力」と回答者の学歴

「子どもの生きる力」に関しては、「親の生きる力」ほど顕著な回答者の学歴差は生じなかったが、「子どもの生きる力」の総合得点と「公共意識」で、大学・大学院卒者の得点が、中学・高校卒者よりも高いこと、「創造性・探究心」に関しては、大学・大学院卒者の得点が、中学・高校卒者と短大・高専・専門学校卒者の両群よりも高いことが示された。

「公共意識」は、公共の場でのマナーや危険回避などのしつけができていないかを測っているものである。また、「創造性・探究心」は、物事に興味を持ち探究したり、自分なりに工夫する能力である。これらの因子で学歴差が生じた理由は、池田・安藤・宮本(2012)が示したしつけや体験機会についての学歴差に関する知見で説明できるかもしれない。池

田ら(2012)は、770名の幼稚園児の保護者対象の調査から、母親が大学卒の場合、高校卒の母親よりも、子どものしつけや安全指導をより行い、豊富な体験機会や文化・芸術体験を多くさせていることを示している。したがって、教育歴が長い親のほうが、様々な経験をさせるために、子どもを普段の生活環境とは異なる公共の場に連れていく機会が多く、その中で公共マナーをしつけていることが考えられる。そして、そのような多くの経験や、創造性、探究心の向上を支援する家庭の雰囲気の中で、子どもの創造性や探究心が育まれている可能性が考えられる。

一方、子どもの生きる力のその他の因子で学歴差が生じなかったのは、これらが日常生活や社会的ネットワークの中で育まれる要素だからかもしれない。

3歳から5歳の子どものしつけに関する母親の意識調査(岡崎・新谷・小沢・中田・小林・埴・石川・徳田・井坂, 1990)では、「あいさつ」「物を大切にする」「約束を守る」「片づけ」「最後までやりとおす」などが、どの年齢の子どものしつけでも重視されていたが、これらは、本研究の「計画性」「他者への礼儀」に含まれる内容である。したがって、子どものしつけとして親が重視する最も一般的な項目については、学歴による差が生じなかったと考えられる。

「子どもの生きる力」に影響する「親の生きる力」

重回帰分析の結果、全体では「親の生きる力」の「論理性」「他者への礼儀」「子育て関連の情報交流」「対処能力」が、「子どもの生きる力」を高める可能性が示された。この結果と回答者の最終学歴別の結果を併せて考察を行う。

まず、「論理性」は、学歴別の分析で、全

での群で一貫して影響力を持つ因子であった。藤木（2009）は、創造的な解決力を持つ子どもを育てるには、保育者自身が常に自分の保育を振り返り、その状況での最善を判断できる反省的実践家でなければならないとし、高等教育における批判的思考の能力や態度の育成の必要性を論じている。本研究において、「論理性」は「親の生きる力」の達成スキルにおいて第一因子であり、達成スキルを構成する重要な因子である。「論理性」が保護者の学歴に関係なく子どもの養育に必要な能力であるというこの結果は、高等教育だけでなく、中等教育においても「論理性」の育成が急務であることを示唆していると言えよう。また、学歴別の分析では、全体での分析では選出されなかった「探究心」が、短大・高専・専門学校卒と大学・大学院卒では影響力を持っていた。「論理性」と「探究心」は批判的思考の中核となる要素であることから、高等教育での批判的思考の育成が、保育者として創造的な解決力を持つ子どもを養育する上で必須とする藤木（2009）の指摘を実証する結果となったといえよう。

2番目に抽出された「他者への礼儀」は、中学・高校卒と短大・高専・専門学校卒では影響力を持っていたが、大学・大学院卒では影響力を持っていなかった。安藤・池田（2012）は、中学生を対象とした4波パネルの研究で、批判的思考態度が獲得された後で、批判的思考行動としてのコミュニケーション行動が獲得されるという因果関係を示しているが、このような獲得プロセスが成人でも適用できるのかもしれない。Table 3で示したように、大学・大学院卒者の達成スキルの得点と、対人スキルの「他者への礼儀」「対人効力」の得点は、他の2群よりも有意に高い。したがって、敬語を状況によって使い分けるなどの「他者への礼儀」は、達成スキルを獲

得した大学・大学院卒の保護者では概ね獲得されているために、子どもの生きる力の育成に対して直接的には影響力を持たなかったと考えられる。

3番目に抽出された「子育て関連の情報交流」は、学歴別分析では大学・大学院卒でのみ影響力を持っていたが、この因子の平均値は短大・高専・専門学校卒が一番高く、大学・大学院卒の得点は他の2群と有意な差はなかったものである（Table 3）。「子育て関連の情報交流」を行うには、子どもの通う幼稚園の職員や保護者、近所などの人との積極的な交流が必要である。この結果から、「対人効力」が高く、敬語などを使い分ける「他者への礼儀」を習得している大学・大学院卒者に関しては、それらを積極的に使うこと、もしくは有効に使っている姿を子どもに見せることによって、「子どもの生きる力」が高まるということを示していると言えそうである。また、本研究の対象者の大学・大学院卒者は、有職者の割合が相対的にやや多いことから、時間的に制約のある人が多いことが想定できる。そのようななかで子育てに関する情報を効率よく集め、問題を解決するための対人交流に積極的であることも、「子どもの生きる力」に影響したのかもしれない。今後の検討が必要である。

最後に抽出された「対処能力」に関しては、学歴別分析では短大・高専・専門学校卒でのみ影響力を持っていた。短大・高専・専門学校卒の「対処能力」の平均値は全体の平均に近く、他群との間に有意差はなかった（Table 3）。「対処能力」は、趣味や自分なりのリラックス法を持っていたり、自分の個性や特性を理解し活用できる能力である。大学・大学院卒者ほど専門性が高くはないが、高校卒業時に短期間の進学を選んだ短大・高専・専門学校卒者にとって、自分の個性や強みを把握して

いることは、子どもの個性への気づきをもたらすなど、子どもの養育に影響するのかもしれない。藤木・沖林(2008)は、批判的思考の態度をできるだけ早い段階で形成するには、自分の専門分野に関する自覚をさせることが重要であると指摘しているが、大学と比較して、比較的短い期間で専門教育を行う短大・高専・専門学校においては、専門性と共に学生自身の特性に関する気づきを与える機会も必要なのであろう。この点についても今後の検討が必要である。

なお、本研究で得られた重回帰分析のモデルは、決定係数からいずれも「子どもの生きる力」の2割程度を説明しているに過ぎない。「親の生きる力」が「子どもの生きる力」の2割を規定しているという結果を多いと見るか少ないと見るかには議論があるが、注意が必要な点である。今後は、「子どもの生きる力」の各因子への「親の生きる力」の影響力に関する検討に加えて、独立変数に家庭環境、養育態度、親の過去の体験、文化・自然経験などを加え、「子どもの生きる力」に関するより精緻なモデル化を行う必要がある。

また、本研究で検討した2変数は、論理的に「親の生きる力」から「子どもの生きる力」に対する因果関係を想定できるが、横断データを扱っていることから、厳密な意味での因果関係は推定できない。より厳密な検討のためには、パネルデータなどの縦断データを用いた検討が必要であろう。また、言語能力などの問題で「子どもの生きる力」が保護者による主観的評価となっている点にも注意が必要である。今後は幼稚園の教諭など、より客観的な評価と合わせた検討も必要であろう。

【まとめ】

本研究で得られた結果をまとめると以下の3点に集約できる。①教育歴が長いほど「親

の生きる力」が全体的に高く、特に「論理性」や「探究心」などを含む達成スキルは教育歴が長いほど高い、②保護者の教育歴が長いほど「子どもの生きる力」の「公共意識」と「創造性・探究心」が高い、③「子どもの生きる力」に対し、「親の生きる力」の「論理性」「他者への礼儀」「子育て関連の情報交流」「対処能力」の4因子が影響し、そのなかの「論理性」は学歴に関連なく影響力を持ち、「探究心」は短大以上の学歴を持つ場合には影響力を持つ。

本研究の結果から、「子どもの生きる力」には、その保護者の「生きる力」のなかの特に「論理性」や「探究心」などの批判的思考態度が関与していること、そして、その「親の生きる力」の向上に、大学などの高等教育がある程度の貢献をしていることが示唆された。高等教育に従事する者は、次世代の子どもの教育も同時に担っているという自覚を持ち、学生の批判的思考の態度とスキルの育成を心掛ける必要があるだろう。また、この結果は、批判的思考育成の教育が初等・中等教育に導入されることで、このような学歴差が減少することを示唆しており、批判的思考を育成する教育の早期導入が切に望まれる。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました園長先生はじめ現場の先生方、そしてご回答くださいました保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

本研究は、平成20～22年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号20500800(研究代表者:池田まさみ))および、調査の一部はJTB法人東京による共同研究費補助金を受けて遂行した。

【引用文献】

- 安藤玲子・池田まさみ (2012). 批判的思考力の獲得プロセスの検討 —中学生の4波パネルにおける因果分析から—, *認知科学*, 19(1) 83-99.
- ベネッセ教育研究開発センター (2001) 小中学生の「生きる力」自己評価
[http://benesse.jp/berd/center/open/report/21seikigata/2002/02/chap02_02_07.html (2010/5/15 現在)]
- Ennis, R. H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron, & R. J. Sternberg (Eds), *Teaching thinking skills: Theory and practice*. New York: W. H. Freeman and Company. Pp. 9-26.
- Ennis, R.H. (1991). Critical thinking: A streamlined conception. *Teaching Philosophy*, 14 (1), 5-25.
- 藤木大介 (2009). 子どもの創造的課題解決力を育成できる教員・保育者の養成: 「子ども学」を具現する者としての教員・保育者, *子ども未来学研究* (4), 43-46.
- 藤木大介・沖林洋平 (2008). 入学後3ヶ月間の大学教育を通じた批判的思考態度の変化 —新入生がもつ専攻領域に関する知識の影響— *日本教育工学会論誌*, 32 (suppl.), 37-40.
- 後藤康志 (2006). 学習者のメディアに対する理解や態度の因果モデルの検討<特集>情報教育の成果と課題. *日本教育工学会論文誌* 30, 183-192.
- 久原恵子・井上尚美・波多野諠余夫 (1983). 批判的思考とその測定. *読書科学*, 27, 131-142.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2000). クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究. *三重大学教育学部研究紀要 (教育科学)*, 51, 161-173.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2001). クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究(2). *三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要*, 21, 93-102.
- 市川伸一 (2001). 批判的に読み, 自分の主張へとつなげる国語学習. 大村彰道 (監), 秋田喜代美・久野雅樹 (編) 『文章理解の心理学 認知, 発達, 教育の広がりの中で』, pp.244-255. 北大路書房
- 井上尚美 (1984). アメリカの最近の作文教科書: レトリックと批判的思考を中心に. *国語科教育<特集>国語単元学習の検討*, 31, 67-74, 1984-03-28.
- 池田まさみ・安藤玲子・宮本康司 (2012). 幼児期の問題行動と家庭力. 菅原ますみ (編著) 『1巻子ども期の養育環境とクオリティ・オブ・ライフ』, pp.101-117. 金子書房
- 楠見孝・平山るみ (2009). 消費者の食品リスクリテラシーの構造: 学歴と批判的思考態度の影響 *日本心理学会第73回大会発表論文集*, 86.
- 経済産業省 (2006). 「社会人基礎力」の具体的な育成・活用シーン.
[<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> (2010/5/15 現在)]
- Kohen, D.E., Levethal, T., Dahinten, V.S., and McIntosh, C.N. Neighborhood disadvantage: pathways of effects for young children. *Child Development*, 79, 156-169.
- Marmot, M. (2007). 『ステータス症候群: 社会格差という病』 (2007) 鏡森定信, 橋本英樹 (監) 日本評論社
- 岡崎比佐子・新谷敏夫・小沢恒三郎・中田カヨ子・小林厚子・埴和明・石川洋子・徳田克己・井坂由美子 (1990). 幼児の基本的習慣の発達に関する研究: (2) しつけに対する母親の意識, *日本保育学会大会研究論文集*, 43, 84-85.
- 沖林洋平・神山貴弥・西井章司 (2006). 児童・生徒の情報リテラシーの認知的基礎に関する研究—情報モラル課題と情報活用能力, 批判的思考態度の関連. *学部・附属学校共同研究紀要*, 35, 333-342.
- 外山紀子・小館亮之・菊地京子 (2010). 母親における育児サポートとしてのインターネット利用, *人間工学* 46(1), 53-60.

Appendix

親の生きる力（達成スキル）項目

論理性	やることの段取りを考えている
	ものごとを筋道立てて考えている
	困難な問題でも自分で解決しようと努力している
	ものごとに臨機応変に対応している
探究心	自分とは別の意見も考慮している
	経験したことの無いことにもチャレンジしてみたい
	もっと深く学んでみたいことがらがある
情報収集・整理	外国の文化や人々の暮らしについてもっと知りたい
	自分の調べたことが正しいかどうか、他の資料などで確認している
	分からないことはそのままにしないで調べている
対処能力	調べた情報を整理し、まとめている
	面白いことや楽しいことを自ら見つけている
	自分なりのストレス解消の方法をもっている
	自分にできることや向いていることが何かを知っている

親の生きる力（対人スキル）項目

子育て関連の情報交流	園の他の保護者と、園の方針や先生について、話すことがある
	園の他の保護者と、子どもの習い事や進路について、話すことがある
	近所の人や子どもの友達の親などと気軽に会話している
	子どもの園の行事やPTA活動などに積極的に参加している
対人効力	子育てについて、気軽に相談できる人がいる
	人前でも緊張せずに自己紹介している
	人前で自分の考えや意見を言っている
自他の子の世話	はじめて会った人とでも会話を続ける
	自分の子ではなくても叱るべきときはきちんと叱っている
	地域の活動や行事に積極的に参加している
他者の尊重	子どもの友達を、自分の子どもといっしょに公園や家で面倒みてあげる
	使うべきときに、きちんとした敬語を使っている
	感謝やお詫びの気持ちを相手にきちんと伝えている
	人の話を最後まで聞いている

子どもの生きる力項目

公共意識	<p>危ないところには近寄らない</p> <p>見知らぬ人にはついていかない</p> <p>人の嫌がることはしない</p> <p>公共の場（電車の中など）で騒がないでいられる</p> <p>みんなが使うものを大切にすることができる</p> <p>していいことと悪いことの区別ができています</p>
計画性	<p>一度始めたことは、ねばり強く最後まで続けることができる</p> <p>翌日のしたくや準備をすることができる</p> <p>苦手なことでも努力することができる</p> <p>遊んだおもちゃの片付けをすることができる</p> <p>約束したことを守ることができる</p> <p>自分のことは自分でやろうとする</p>
創造性・探究心	<p>面白いことや楽しいことを自ら見つけることができる</p> <p>ものごとを工夫して取り組むことができる</p> <p>ものを作ったり、絵を描いたりすることが好き</p> <p>納得いくまでくりかえし質問してくる</p>
対人効力	<p>友だちと仲良く遊ぶことができる</p> <p>グループや集団のなかでもうまく行動することができる</p> <p>年齢の違う友だちとも仲良く遊ぶことができる</p>
他者の尊重	<p>家族やまわりの人に「ありがとう」と言える</p> <p>家族やまわりの人に「ごめんなさい」と言える</p> <p>大きな声であいさつできる</p>
感受性	<p>絵や写真などを見て、感動している</p> <p>空や景色などを見て、感動している</p> <p>小動物などを見て、かわいいと感じる</p>